

学校 教育 目標	確かな学力と豊かな心を身につけ、 たくましく未来を拓く子どもの育成 ～主体性の育成～	昨 年 度 の 評 価 概 要	（令和5年学校評価 概要） ・全体的に教育環境がよく整備されていて、子どもたちは伸びやかに学校生活を送っている。 ・「学校・直・地域」の関係ではなく、推進員さんの努力により、「支援から協働」へのよい関係が育ってきている。さらに、「地域はもう一つの教室」として、子どもも大人もともに「多様な人となりが」「多様な経験」ができる場を関係機関と連携しながら、「子ども」を真ん中にして、「学校」「地域」が協働して進めていけるとよいと思う。 ・小中学校、PTA、地域が連携して土台となり、その中で具体的な学び、人との関わりを通して子どもは成長していると感じる。来年度も、土台としてのつながりを強めながら、子どもたちの生きる力の向上について考えていきたい。 ・行事だけではなく、日常の学校生活において、あらゆる地域人材が学校に溶け込んでおられ、地域の子どもを地域で育てる機運が醸成されていると実感している。今後は、SNS等を通じて、取組の経過も地域の人々に細かく伝わり、それに対するフォローが得られるような体制ができるとよいと思う。	中 期 的 目 標	< 中期的【3年間】目標(3年目) > ○「学ぶ力の向上」をめざし、個別最適な学びと協働的な学びを実現する授業改善を進める。 ○義務教育9年間の学びの土台となる基礎基本の習得を徹底し、主体的な学び方を身につける。 ○児童理解を深め、主体的体験的な活動を重視し、ふれあいを基調にした教育活動を進める。 ○多くの人との関りを通し、自分の個性や可能性を信じ、よりよく生きようとする「志の教育」を進める。 ○家庭・地域との連携を密にし、開かれた学校づくりに努める。
----------------	--	--------------------------------------	---	-----------------------	---

評価項目(指導力点)	指標:到達目標(成果指標・取組指標)	達成状況	評価	改善方策	学校関係者評価
【確かな学力の力点】 ●子どもを真ん中においた個別最適な学びと、協働的な学びになる授業改善 ●読書活動の活性化 ●特別支援教育の充実 ●自主学習の習慣を確立	中学校と一体となって授業研究やOJTに取り組み、思いを深め、達成感のある学びを実現する指導力の向上に取り組む。 【月1回のOJTの実施100%（教師）】	「学び合い」の日常化を進めるべく、小中教職員混合のグループ編制を行い、授業研究に取り組んだ。研究の取組は「人権教育における授業と教材に関する研究集会」で発表し、指導助言をいただくことができた。「学び合い」の日常化には引き続き、研究実践や教職員の意識化が必要である。 【ベア・グループ学習 教職員75.0% 個に応じた指導 教職員100%】	A	○小中教職員がともに学び高め合える学園研究について、テーマや組織構成を工夫し、授業力のさらなる向上に努める。 ○学校司書や図書ボランティアの皆さん、市立図書館と連携しながら、引き続き、児童が図書に親しめる機会を充実させるとともに、図書室の冊数を増やすなど機能を充実させる。 ○家庭学習の手引きを保護者へ周知したり、職員間で取組状況の交流をしながら、効果的なあり方を探っていく。	・どの学年の子ども達も意欲的に学習に取り組み、挨拶や言葉遣いも丁寧である。 ・朝読書の継続で、本のある生活が当たり前になっている。授業を通じて読書への誘いを増やすとよいのではないかと。 ・夢ノートについては低学年に使い方や見本を提示するなどの工夫があるとよい。
	・朝読書の充実や、読書環境の整備を進め、読書に親しむ児童を増やす。【読書冊数目標到達70%(児)/50%(保)】	読書ボランティアによる読み聞かせやお話会の実施、図書室やお話しルームの環境作りなど、児童が図書に親しむ機会は充実している。また寄贈や市立図書館との連携で、蔵書も増やすことができた。【児童62.3%/保護者15.4%】	B		
	・ゆめノートを活用した家庭学習の充実に取り組む。 【家庭学習の時間を達成した児童が85%以上】	家庭学習の手引きや学年、個々の状況に応じた課題の工夫を行っている。【家庭学習を頑張っている 児童79.3%/保護者37.4%/教職員87.5%】	B		
【豊かな心の育成の力点】 ●自分事として生き方を見つめる道徳教育の推進 ●望ましい人間関係を土台にした生徒指導の推進 ●主体性を引き出す児童活動の推進	・他の教育活動と連携した道徳カリキュラム(別様)を着実に進め、日常に立ち返る道徳教育を進める。	年間計画に基づいて、道徳科の授業を実施している。学級が直面している状況や課題に応じて、適時取り扱う内容を変更するなど柔軟な対応も行っている。【道徳の授業がためになる 児童92.8%】	A	○道徳教育はすべての教育活動を通して行いながら児童の道徳性を育んでいくことを共通理解し、共通実践していく。 ○学校地域連携カリキュラムの内容について、地域学校協働活動推進員さんの意見も踏まえ、児童に実りある、持続可能な内容になるよう改善していく。 ○これまで実施している縦割り活動や中学校との交流活動とともに、教職員の柔軟な発想も取り入れながら、より魅力ある活動に高めてく。その成果を子どもがどう育ち、高まってきたかについて教職員が共有することを大事にする。 ○インターネットリテラシーの育成はこれからの重要な教育課題である。タブレットの使い方を通じて指導を徹底する。	・小中学校の連携、地域との連携等、自己の生活範囲を超えた学習が充実していると感じる。 ・先生と子どもの距離が近く、信頼関係が築かれている。 ・自然や文化を経験して、感性を豊かにする機会を大切にしていきたい。 様々な体験活動の取組に対して児童がどう感じているか、評価する必要がある。
	・文化芸術や自然体験、栽培活動、多様な人とのふれあいを通じて、豊かな情操を養う。	学校地域連携カリキュラムに基づき、校区の自然や環境を生かした学習に取り組んだ。また多くの地域ボランティアの皆さんのおかげで学びを豊かにしていただくことができた。	A		
	・中学校と連携した特別活動の活性化を図り、児童の主体性を引き出す活動に取り組むとともに、望ましいリーダーの育成を図る。 【学校生活の楽しさ:80%(児)/75%(保)】	第1ステージの「ちびっこフェスティバル」に交流活動、第2ステージの「高島学園マルシェ」による体験学習を中心に児童生徒の主体性の育成に取り組んだ。「高島学園マルシェ」では、各ブースの計画、準備、実施の活動を通してステージ活動が活性化した。また、中学校文化祭への参加や陸上記録会に向けた中学生との合同練習等にも取り組んだ。 【学校が楽しい 児童93.6%/保護者91.9%】	A		
【豊かな人間関係を結ぶ力の育成の力点】 ●相手の立場を尊重し、人権意識の高い、いじめを許さない集団づくり ●礼儀正しい節度ある生活態度(あいさつ、時間を守る、掃除)の育成	・児童集会や行事等を通じて、友達や多様な人々との交流の機会を増やす。 【学校生活の楽しさ:80%(児)/75%(保)】	1～6年生の縦割り活動や、ステージでの活動、委員会活動、クラブ活動など異集団による活動を充実させることができた。特に6年生では、すべての児童に活躍の場を与えるべく、配慮をしながら取組を進めた。 【学校が楽しい 児童93.6%/保護者91.9%】	A	○縦割り活動やステージ活動をはじめとする行事や、学校地域連携カリキュラムのによる地域の方とのふれあいを通じて、豊かな人間性や社会性、情操を育んでいく。 ○教職員が常に人権を意識しながら、日々の指導に臨むよう申しあわせるとともに、本校のいじめ防止基本方針のもと、いじめの未然防止やいじめを認知した場合には、保護者と連絡を取りながら、早期の組織対応を徹底する。 ○人よりも先に自ら挨拶をする児童がさらに増えるよう日々の声掛けや指導を粘り強く継続する。	・いじめにつながるようなことがあれば、早期に対応していることは評価できる。担任に相談できない児童が一定いるため、カウンセラーの対応も必要と考えられる。何かあればすぐに向き合い、対応すると周知することで安心感、信頼関係を作り、不登校を防ぐアプローチを行っていく。 ・挨拶はなぜ自分からする必要があるのか等、異年齢集団における主体性育成の側面からも指導が必要なのではないかと。
	・人権意識を高める指導に加えて、中学校と協働した児童生徒の主体的な活動を通して、いじめ未然防止に取り組む。【いじめがなく学校生活が楽しい95%(児)】	人権の日の全校放送や講話をはじめ、小さな出来事でもそれを学年や全校で考える指導を行った。【学級の友達を大切にしたい 児童100%】【自分によいところがある 児童82.6%】 学校いじめ防止基本方針に基づき、いじめの未然防止に努めている。いじめを確認した際には、些細なものでも、早期の組織対応を行っている。【いじめ認知件数 R6:11件 R5:11件 R4:3件】	A		
	・真面目で誠実に学校生活を過ごす態度を育成する。 【あいさつ、時間、そうじ85%以上(児童)】	向上心もち、真面目に取り組む児童が多く、落ち着いて生活することができている。【あいさつ 児童89.9%/そうじを頑張る 児童95.8%】	A		
【健康な心と体の育成の力点】 ●児童理解を土台にして、自己指導力の向上をめざす生徒指導の推進 ●命を大切にし、健康で安全な生活実現を目指し、行動できる資質能力の育成 ●基本的生活習慣の確立と指導の充実	・生徒指導の3機能を意識した教育活動を展開し、一人ひとりの児童に居場所がある学級づくりを進める。 【学校生活の楽しさ:80%(児)/75%(保)】	授業づくりの基本として「自己決定の場を提供」「自己存在感の感受の促進」「共感的な人間関係を育成」を日頃から意識するよう、職員に指導している。管理職が教室参観を行いながら、適宜確認している。【学校が楽しい 児童93.6%/保護者91.9%】	A	○児童の人権を大切にし、安心して生活や学習することができるよう、研修の機会を設けるなど、教職員の人権意識のさらなる向上に努める。。 ○学校と保護者がしっかりとつながり、理解や協力を得ながら指導していくことができるよう保護者への連絡や関係づくりに努める。 ○家庭における食事や睡眠、スマホやタブレットの使用状況など、児童の状況の把握に努め、生活習慣や意識向上に向けた啓発に努める。	・教職員と保護者との連絡、関係づくりは丁寧に行われている。 ・基本的生活習慣の確立は、家庭での生活に起因するところが大きいので、親として身につけたい意識や習慣、行動の学習機会を設けるなど、保護者の学ぶ場の充実が必要。 ・規則正しい生活、ゲームとの上手な付き合い方については、言われてするのではなく、自らを律し、計画的に取り組めるような指導が必要。
	・児童理解のための教育相談の機能を充実する。 【困っていることを先生に相談できる85%(児)】	児童理解のためのアンケートを学期毎に実施している。その結果をもとに個別面談をおこない、具体的な実態把握に努めている。不登校傾向児童や保護者にも丁寧な対応を行い、関係機関とも連携している。【先生は相談しやすい 児童85.2%/保護者77.2%】	B		
	・生活状況の把握と望ましい生活習慣の定着に取り組む。	各学級における指導、保健だより等での保護者への啓発に努めた。	B		
【小中一貫教育推進の力点】 ●学園授業研究会の充実 ●小中教員の交流指導による連続した指導の充実 【地域とともにある学校づくりの力点】 ●学校運営協議会と地域学校協働活動の連携、一体化 ●協働して地域全体で子どもの成長を支える風土の醸成	・中学校と一体となって授業研究やOJTに取り組み、思いを深め、達成感のある学びを実現する指導力の向上に取り組む。	「学び合い」の日常化を進めるべく、小中教職員混合のグループ編制を行い、授業研究に取り組んだ。研究の取組は「人権教育における授業と教材に関する研究集会」で発表し、指導助言をいただくことができた。「学び合い」の日常化には引き続き、研究実践や教職員の意識化が必要である。 【ベア・グループ学習 教職員75.0% 個に応じた指導 教職員100%】	A	○学園一体となった学校運営協議会により、小中一貫の視点で多くのご意見をいただき、学校経営につなげることができた。引き続きご意見をいただきたい。 ○学校地域連携カリキュラムをもとに地域人材の協力を得ることができ、児童の学びも深く、豊かになっている。引き続き協力が得られるよう、地域学校協働活動推進員さんとも連携しながら努めていきたい。 ○PTAから新たな形でのスタートとなる。それぞれの思いを十分出し合い、子どものためになる取組を創っていきたい。	・開校以来、中学校教員による専科指導に加えて、小学校教員が中学校で授業を行う取組は評価すべきである。 ・高島学園として、9年間の中でそれぞれ教職員、児童同士、地域学校協働活動推進員、地域とのつながりと、様々な角度から創意工夫しながらアプローチ出来ている。続けていきたい。 ・見守られ、教え、励まされていた低学年の子どもたちがやがて学校のリーダーとなり、中学生と協働して自らの課題を乗り越えていく姿は頼もしく、共に学ぶ大人も楽しい。
	・小中教員の交流授業を進め、小学校の教科担任制と中学校での複数指導の拡充を図る。	中学校教員による日常的な専科指導(理科、音楽)に加え、学期ごとに実施した小中一貫教育WEEKでは、小学校教員が中学校で、中学校教員が小学校で授業を行うという新たな実践を試みた。【教職員交流の充実 教職員75%】	A		
	・学校運営協議会と協働し、学校地域連携カリキュラムによる教育活動を推進する。	学校運営協議会の協力と地域学校協働活動推進員のコーディネートにより、多くの地域人材の協力を得て、学習の幅を広げ、内容を深めることができた。	A		
	・PTAと協働し、学習習慣の定着に取り組む。	PTAについて大きな方向転換となる1年であった。今後のあり方について、学校と保護者の関係性が希薄にならないよう、サポーターと相談しながら進めていく。	B		

学校関係者評価	総 評	評価	学校関係者評価を踏まえての改善点
	・全体として、学校の取組は小中連携して様々な角度から子どもたちにアプローチできている。子どもたちの豊かな育成に寄与できている。 ・隣接型小中一貫校の特性を最大限生かし、小中教職員が協働して授業研究や授業交流に取り組む、子ども達も意欲的に学習している。また、学校地域協働活動推進員さんのコーディネートにより、たくさんの地域の大人や保護者の姿が学校にある日常が増えた。周りの大人や先生、身近な先輩からの励ましや自分が大切にされているという感覚が周囲への信頼や安心につながっていると思う。今後も、小中一貫教育、学校地域連携カリキュラムを軸として、先生、児童、保護者、地域の人々が目標を共有し、協働できるとよい。 ・地域の様々な人材に支えられ、多様な角度から学校生活のモチベーションを見出していることが子ども達の様子から伺える。人口減少、少子高齢化、地域におけるつながりの希薄化が課題の現代社会において、これは素晴らしい取組であると評価できると考えられるので、これからも推進してもらいたい。 ・安定した学校環境の中で、子ども達が生き生きと学び、成長している姿が見られる。教職員の意欲も高く、向上しようとする研究に取り組んでいることが感じられる。その良さを保護者や地域に発信し共有して、より良い教育の場にしてほしいと思う。	A	・学園における小中一貫教育や地域協働の取組、子どもの成長、成果などを保護者や地域へ分かりやすく広報することで、理解をより深めてもらうとともに、取組のさらなる充実につなげる。 ・学校運営協議会や保護者の組織と連携しながら、保護者が学べることでできる機会を設定し、意識向上につなげていく。 ・現在の取組について教職員の負担感も配慮しながら、工夫改善を図り、充実を目指す。 ・年度末において、目標の達成度がより分かりやすいものとなるよう指標やアンケート項目を見直し、改善を図っていく。